

## 未来に伝えたい昭和30年代の遊び！②

先月号で、連載の動機について触れました。今月から、テーマの本題に入ります。「子ども頃、遊びよった遊びで、なんば覚えちよるかい？」と聞いて、男性軍のほとんどがこれを真っ先にこたえてくれました。それだけ、流行った人気の遊びだったのでしょう。さあ、連載のスタートは、この遊びから・・・。

### 1 ダッチョキン(脱腸金?)

誰が名付けた「ダッチョキン」。すってくろ連中「ダッチョキン」。乙女恥じらう「ダッチョキン」。遊び仲間が集まると、誰ともなく「ダッチョキンばすーや。(しよう。)」と言って、地面に図を描き始め遊んでいました。二手に分かれて戦う「陣取り遊び」の類です。

学校での休み時間や休みの日の近所の広場で夢中になって遊んだのは、どんな魅力が潜んでいたのでしょうか。

#### ○遊び方

- ①運動場や広場にダッチョキンの図を描く。→右の図参照
- ②まず、メンバーを二つのチームに分ける。その際、リーダー格が一人ずつ指名する場合もあるし、体力が同じぐらいのもの同士が「裏か表」などをやって分かれる場合もある。要は、二つのチームの力関係を均衡にすることが大事。人数制限はない。
- ③二つのチームは、攻撃(外側)と守り(青の線内)に分かれる。遊び開始とともに、攻撃側は外側を三回ほどまわり、入口から中へ入る。守り側は、守りやすいところで攻撃側を待ち伏せする。
- ④相手をラインの外に押し出したら勝ち。一対一でもよし。一人に複数で襲いかかってもよし。チーム全員がやられたら、負け。
- ⑤勝った方は、攻撃側。負けた方は、守り側で、試合再開。飽きるまで続く。

#### ○コメント

- ・相撲のような押し合い、倒し合いになるので、足腰の強い人が有利。→遊びを通して、足腰が鍛えられる。
- ・ラインの広いところ狭いところをうまく利用して、自分より大きくて強い人を倒すのが醍醐味。→作戦、状況判断などの知恵がつく。
- ・特に強い人には複数以上で当たる。→共同戦線。助け合いと協力を学ぶ。
- ・体とからだのぶつかり合い、力くらべが楽しいし、ときに熱くなる。→今の子どもに一番欠けている遊び。そのことが、人間とのかかわりに消極的になったり尻込みさせたりするのではないだろうか。
- ・なんとと言っても、「ダッチョキン」というネーミングがまた昭和のおちかつらしくて面白いですね。

(※写真は、さわらび太鼓の新聞紙相撲です。ダッチョキンではありませんのであしからず・・・)



## カゴじゃなかつよ。テボばって・・・

磯の季節となりました。今回のテーマは、磯の必需品・・・小値賀弁でテボ。背中に背負うテボを、子どもの頃から私(笛吹在出身)は「ソテボ」と呼び、それが小値賀共通語だと思い込んでいました。が、一昨年「スエミカタビカ」という調査をしたときに、知り合いのおじさんから「テボの呼び名も違うもん・・・」と教えられました。「アヨ。知らなかった・・・。」小値賀のこと、まだまだ知らないことだらけです。そこで今回、調べてみることにしました。「ハオー。どうでんよかろうもん。」そんな声が聞こえてきそうですが・・・お許しを。エヘッ！)

最初にお断りしときますが、呼び名の使用地域については、主に・・・という程度でとらえてください。町民すべての方にお聞きしたわけでもなく、現実問題として結婚や転居などによって出身地域は混在してしまっているからです。

### 笛吹、中村、大島、斑など・・・「ソーテボ」もしくは「ソテボ」

語源については、いろいろなものを入れるので雑がなまって「ソー」になったのではないかという意見が一番多く、なかには大きいものを表す意味で「ソー」をつけるという人も・・・。ダジャレ好きな人は「象(ゾウ)」からきたとも・・・。(笑)

### 浜津地区・・・「シマテボ」

語源については、なぜか島(シマ)ではないだろうという意見がほとんど。じゃあ何から？ある方に「想像・予想でどうですか？」と無理に振ると「う～ん・・・縞々(シマシマ)に見えるからじゃない。」と。その後、ご自身でもテボを編んでいたという地区の古老にたずねると「編む竹を二つに割ると、皮の方と中身の方とで色が違うけん、編んだら縞模様になる。その模様ば見て、シマテボっちゆうとじゃなかつか。」と縞々(シマシマ)の説が補強されました。

### 前方地区、一部柳地区・・・「カラテボ」

語源については、聞いた人のほとんどが、からう(背負う)テボだから、カラテボ・・・という意見でした。宇久でも、同じ呼び方だそうです。一人だけ中国から伝わったので唐(カラ)テボという意見も。

### 木場地区・・・「セナテボ」

語源は、まさに背中に当てるので「セナテボ」。納得です。

### 柳、納島地区・・・「モサテボ」

語源については、みなさん、知らん・わからん、という方ばかり・・・無理やり聞くと、猛者(モサ)じゃなかつよばって・・・という人と藻ばかつごったけんじゃなかつか・・・という方がおられました。藻(モ)の意見が有力かもしれません。

以上、こんな小さな自治体で、同じ物に対して生活地区によって5つの異なった呼び名がつけられていることに驚かされます。もしある品物が地区間を流通するならば、自然と共通語となり同じ呼び名になるでしょう。その品物そのものが、それぞれの地区で手づくりされ、それぞれの地区内だけで流通していたのかもしれない。テボはその昔、それぞれ地区内のテボづくり名人の作品を購入して使用していたのではないかと予想できそうです。

ちなみに長崎市出身の人は、そのままカゴまたは背負いカゴ。京都出身の人は、「見たことない。」だそうです。さすが都会人です。おちか共通のテボとは、竹で編んだカゴのことですが、ネットで調べると、うどんを湯がく時の縦長の湯切りザルのことを言うのだそうです。(※さあ、今年も美味しいウニが食べられそうですね。磯場でお会いしましょう。)

